

2025 千葉県公立高校入試 国語

第四問

【解説】

(1) 「外れ値」の文章中での意味を答える問題。

一般的に「外れ値」は、実験データなどで明らかに異なるデータ値を指す言葉であり、一般的な会話の中でも用いられる。本文では、サイエンスとアートにおける話題の中で用いられており、サイエンスで「外れ値」は棄却されるものであるが、アートでは注目されうる要素であると述べられている。それぞれの観点に合致する選択肢を選ぼう。

ア・「例外だからこそ注意して扱うべきデータ」は不適。サイエンスでは注意して扱わない。

イ・「でたためで使用する価値のないデータ」は不適。サイエンスでは価値はないが、アートでは価値が見いだされることがある。

ウ・正答。サイエンスでは外れ値からは結論は見いだせない。アートにおいては偶然性が大事にされる (5行目) とあり、外れ値のような偶然の結果と合致する。

エ・「条件を整えても正解には至らない」は不適。サイエンスでは条件を整えれば必ず同じ結果になる (3行目) ため、外れ値は条件を整えれば正解に至る。

(2) サイエンスとアートの対比構造を『「わたし」の存在』の観点から読解する問題。

本文10行目の「いっぽう」の前がサイエンスについて、後がアートについて述べられている。それぞれについて本文の表現を引用し整理すると次の通り。

・サイエンス

論文表現では「考えられる」という形が好まれる。(8行目)

↓誰がどう見てもそう解釈できる無理のない論理。(9行目)

・アート

サイエンスとは異なり「わたし」がなければ始まり (11行目)、他の誰もが気付かなかった「わたし」の「思う・感じる」を切り出して表現する。(12行目)

設問Ⅰ・Ⅱはそれぞれサイエンス、アートについての記述になるため、本文の記述との言い換えになっている選択肢を考えればよい。

ア・「矛盾のない平均化された」は「矛盾のない」という表現は適当であるが、「平均化された」は不適。平均化されるのはデータであり、そのデータから一般的な考察が生まれる。

イ・Ⅰの正答。「一般」という表現は「広く認められること」を表すために適当な語。

ウ・「無理のない表現で解釈できる」はサイエンスに対しては、表現に対する解釈は求められていない。アートに関しては、解釈は各人によってそれぞれ異なり、一つの正解があるわけではないと記載があるため (13行目) 不適。

エ・「対極に位置するわけではない」はそれぞれ文意が通らないため不適。

オ・Ⅱの正答。

(3) 傍線部の内容説明問題。

第3段落でサイエンスとアートの対比構造が述べられたのちに、傍線部を含む第4段落で、根幹にあるサイエンスとアートの共通部分の主張が展開される。したがって、解答の根拠は第5段落以降にあると考えられる。

第5段落以降を見ると、5〜7段落にかけて実体験に基づく具体内容を記述し、第8段落2行目に「**どちらも(サイエンスもアートも)核となるのは、身の回りの出来事や現象に目を向けて『！』と感じる(ころ)**」とある。この部分が傍線部の「共通するもの」と合致する。

ア・正答。「自らの感情の高まりを感じる」は「『！』と感じる」の言い換えとして適当。

イ・「小さな疑問でも解決を図ろうとする」は不適。サイエンスのみに関する記述。

ウ・「自己の成長を意識」は不適。そのような記述はない。

エ・「新たな発見につなげようとする」は不適。サイエンスに関する記述。

(4) 空欄に当てはまる言葉を答える問題。

空欄は内藤さんの会話中にあり、木漏れ日を見て(D)と感じ、それを表現したいと述べている。本文22行目に「**その『感じ』をアートの中に表現したい。**」34行目に「**アートは『！』を形や音に表現していくもの**」とある。したがって、アートに関連する選択肢が正答となる。

ア・正答。本文29行目にも『！』はそのときによって『いいなあ』のこともあれば」とあり、文意にも沿うため適当。

イ・「まれなこと」は文意に合わず不適。また、(3)で自らの感情の高まりを感じることがアートに(もサイエンスにも)当てはまるものである。

ウ・「正しい(ころ)」は不適。アートには正解があるわけではない。(13行目)

エ・「どう役立てるか」はサイエンスに関する記述のため不適。

オ・「なぜそう見えるか」はサイエンスに関する記述のため不適。

(5) 傍線部の説明問題。傍線部は「**こうして考えてみると、文系か理系かということよりも**」に続く文章であるから、単純な文理の分け方との対比構造になっている。また、指示語「**こうして**」が指す内容は、本文36行目から直前まで続く学問領域の区分けの説明と、その応用研究例を指しており、10段落の「『！』から『？』をどう導くか」の例示となっている。

以上の事から、文理という単純な区切りではなく**問いの立て方(！と感じる(ころ))に依って自身の興味や関心を決めていくべき**という内容が解答となる。

ア. 「今後の社会のあり方に大きな影響を与える」は不適。そのような記述はない。
 イ. 「どこに注目して問いを立てるかによって、サイエンスに発展の可能性が見出すことができ」は不適。サイエンスそのものへの可能性を見出すわけではない。
 ウ. 正答。
 エ. 全体としてアートに関する主張をしており不適。

(6) (a)

正答はア。12〜13行目のアートは『思う』や『感じる』を切り出して表現し、それらに「一つの正解があるわけではない」という内容を適当に表現している。
 その他の選択肢は合致しない。

(6) (b)

与えられている文章は、「固定観念に囚われず、自由な発想で感じている（頭をゆるめておく）ことで『！』を感じる事ができる」という内容である。本文では「アートは、むしろ『わたし』がなければじまらない（11行目）」とあるため、「アートと対峙した（向き合った）とき、頭を少しゆるめておくことで、『わたし』だけの『！』を感じる事ができる」という形で指定語句の利用を考えることができる。

また、(4)で見たようにアートは『！』をかたちや音に表現していくもの(33行目)とあるため、空欄の直前「アートにむきあうとき」との接続に注意して指定語句「表現」を使うことができる。

解答例

頭を少しだけゆるめておくことで、わたしの「！」に出会いそれをアートの表現の中に見出す

模範解答

少しだけ頭をゆるめて感じるようにすることで、わたしの「！」をアートの表現の中に見いだす

第五問

- (1) 文法問題。本文の「軽やかで」の「で」は形容動詞の活用語尾。
 ア・「朱墨で」の「で」は格助詞のため不適。
 イ・「思い思いの形で」の「で」は格助詞のため不適。
 ウ・「誇らしげで」の「で」は形容動詞の活用語尾のため正答。
 エ・「叫んで」の「で」は接続助詞「て」の濁音化のため不適。

(2) 傍線部の本文中での意味を答える問題。

リード文で遠田は「生徒たちの書いた『風』の字に納得がいかない」とあり、もう一度風を書くよう指示している(16行目)ことから、雰囲気を一変させる目的が読み取れる。

- ア・正答。「匂いや肌触りを感じさせる」は本文1行目の表記と合致する。
 イ・単なる夏の風そのものの説明で、本文中の意味としては不適。
 ウ・単なる夏の風そのものの説明で、本文中の意味としては不適。
 エ・「蒸し蒸しする室内において」は不適。窓を開けるまでは室内は空調が効いていたことが分かる。(本文3行目)

(3) 傍線部の内容を説明する問題。

傍線部直前に「そういう習慣」とあるがそれは、**実際に風を感じる**ことであるから、**実体験を基にすればいつでも『風』を書ける**という内容の選択肢が正答。
 したがって解答はウ

(4) 傍線部の内容を説明する問題。

- 本文25～30行目に遠田の講評の描写があるため、これに適する選択肢を選ばばよい。
 ア・「生徒たちから好かれようとしている」は不適。そのような記述はない。
 イ・「最大限に夏の嵐の猛々しさを表せるように一貫して改善点を指摘している」は不適。個々人の良さを褒めつつ細かい点の指摘を行っている。
 ウ・「欠点よりも美点に絞って」は不適。前述の通り、指摘は行っている。
 エ・正答。

(5) 傍線部における「俺」の心情を答える問題。

空欄は二箇所あり、それぞれを「だけではなく」で結んでいる。したがって、二つの要素かつIIがより強い要因となるよう考える。

45行目以降の「俺は感心した」とある段落で、遠田の指導を受けた生徒たちの書いた文字やその様子を描写しており、その中で、①「書道はこんなにのびのび取り組めるのか」②「**なににより、(中略)子どもたちの、誇らしげで楽しそうな表情と言ったらどうだ**」とある。

この部分を記述した選択肢をそれぞれ選べばよい。

I

- ア. 選択肢の内容は解答の根拠になり得ないため不適。
 イ. 正答。
 ウ. 「生徒たちの上達を願っている」は不適。本文にそのような描写がない。
 エ. 「生徒の人気を集めようとしている」は不適。そのような記述はない。

II

- ア. 「体験させることを重視している」は②の内容でないため不適。
 イ. 選択肢全体として②の内容でないため不適。
 ウ. 選択肢全体として②の内容でないため不適。
 エ. 正答。

(6) 傍線部の心情を答える問題。

傍線部周辺にある直接的な遠田に関する記述は「いたってマイペースで(中略)花丸を描いた」のみであるから、文章全体の内容を加味し、普段の遠田が大事にしている点にフォーカスして考える。

これまでの設問(3)～(5)の通り、遠田は体験を基にした自分の感覚を大事にしている。傍線部後の遠田の発言にある「その調子で、今度から『風』の一次には吹く風の意味を込める」から本文で一貫した遠田の考えを解答の根拠とすることができる。

- ア. 「自分の指導方針を曲げずに評価したい」は不適。
 イ. 正答。
 ウ. 「言葉の間違ひだけはきちんと正して文字を書いてほしい」は不適。
 エ. 「そのような日常のやり取りを書道に生かしてほしい」は不適。

(7) 本文全体の描写を基に空欄に当てはまる言葉を記述する問題。

指定語は分かりやすい言葉が並ぶため解答はしやすいと思われる。

これまでの設問の通り、遠田は自分の感性を大事にした指導を行っている。それらに対して生徒たちは「正座した生徒たちは、自分以外の書の講評にも耳を傾け、遠田の言葉にうなずいたり笑ったりする」(本文32行目)「子どもたちの、誇らしげで楽しそうな表情」(本文48行目)などの描写から遠田を信頼している様子が分かる。

以上より、「**感性を大事にした指導をする遠田を信頼している**」という内容で字数に合うように記述すれば良い。

模範解答

自分たちの感性を大切にして指導してくれる遠田を、とても信頼している

第六問

【現代語訳】

真偽のほどはわからないが、故・持明院の中納言入道が、秘蔵の太刀を盗まれてしまった。家来の中に犯人がいたため、他の家来が取り調べて(入道のもとへ)と)差し出したところ、入道は、「これは私の太刀ではない。間違いである。」と、(その太刀を)お返しになった。間違いなく、入道が盗まれた太刀だったが、(入道は)家来の恥辱を思っ返したということとを皆も知っていたが、その時は無事平穩に過ぎた。それ故に、(入道の)子孫も栄えた。

(1) 正答(イ)

文脈から、「主語」が、秘蔵の太刀を「盗まれたりける」が故に、侍たちが犯人を見つければよく取り調べを行ったということが読み取れる。

また、下線部分は、盗ま~~れ~~たり~~け~~る と品詞分解できる。

「れ」は受け身の助動詞「る」の連用形、「たり」が完了の助動詞「たり」の連用形、「けり」が過去の助動詞であるために、「盗まれてしまった」と訳すことができる。

よって、秘蔵の太刀を盗まれてしまったのは誰かといえば当然「中納言入道」にあたり、正答は(イ)であると判断できる。

また、この下線部分までに登場する人物、ものの中で選択肢に含まれているものを確認すると、「入道」と「太刀」のみであることがわかる。それ故に他の選択肢を除外した後に、「太刀」を「盗まれたりける」という構造となっていることから太刀に何かを施した動作主がいると考えられ、「入道」であると判断することも可能である。

(2) ゆえに

(3) 正答(ウ)

「これは、我が太刀に**あらず**」の「ず」が否定の意味を表していることを押さえられたかがポイント。すなわち、「これは我が太刀ではない」という意味になる。

状況を考えてみると、この発言は入道の発言であり、侍が入道に刀を差し出した際に述べたものである。そのため、入道が差し出された太刀を見て、この太刀は自分のものではないと述べた、と考えるのが妥当である。よって(ア)と(イ)の選択肢は除外される。次に(ウ)と

(エ)の選択肢についてであるが、差し出された太刀が(ウ)「入道が大切にしていた太刀」であるか、(エ)「入道が侍から預かっていた太刀」であるかを考える。「入道の**秘蔵**の太刀(物語最初に記述)が盗まれてしまい、侍が取り調べを行った結果その太刀を差し出した」というここまでの一連の物語の文脈を考えると、差し出された太刀は入道が預かっている太刀ではなく、盗まれた「秘蔵の」、すなわち大事にしていた太刀であるため、(ウ)が正答

であると判断ができる。

(4) 正答 (ア)

四行目に、「決定、その太刀なれども、侍の恥辱を思ひて返されたりと、人、皆、これを知りけれども」と書かれている。

すなわち、差し出された太刀は間違いなくその太刀(すなわち入道が盗まれた太刀)であったけれども、入道は「侍の恥辱を思つて」返したのである。

このことから、入道は差し出された太刀が盗まれた太刀であると正しく認識しており、侍へ配慮したが故に返却したことが読み取れるため、(ウ)「入道の記憶が曖昧であった」、と(エ)

「入道が間違いを恥ずかしたがった」という選択肢は消去できる。

ここで、(ア)と(イ)の違いは、入道が恥辱を思い遣つた侍が、「取り調べをした侍(すなわち犯人を問い詰めた侍)」であるか、「取り調べをされた侍(すなわち刀を盗んだ張本人)」であるかの違いである。

前記した通り、入道は「侍の恥辱」を思い遣つてこのような行動に出たのである。ここで、恥辱的な行爲を行った侍、すなわち入道が刀を返却せずに受け取った場合に面目を失う侍は当然、取り調べを受けて刀を盗んだことがバレた侍であると考えるのが妥当である。よつて、正答は(ア)となる。

(例えば以下のような例を考えてみて欲しい。

とあるクラスでA君がB君の財布を盗んだとする。B君は財布がないことを先生に伝え、クラスのみんなで探したが見つからなかった。

後日、たまたま犯行をみていたC君が、A君が盗んだことを先生に密告し、その後先生はA君から財布を返してもらつた。先生はクラスにB君の財布が見つかったことのみを伝え、A君が盗んだという事実はクラスには伝えなかった。

このときの先生は、仮にA君が盗んだということをクラスに伝えてしまうと今後A君が学校生活でうまくやつていけなくなつてしまうのではないかと心配し、A君を思いやつたが故に敢えて言わなかつたのだというふうに取れるのではないか。

今この文章中で起きていることはまさしくこれと同じ状況である。

入道が、仮にここで太刀を受け取る、すなわち侍が盗んだということを確認してしまう行爲をする場合、盗んだ侍が今後周りからどういふ目で見られて生きていかなければならなくなるかは容易に想像つくだろう。

(5) (a) 正答 (イ)

「I」の空欄は二箇所あり、両方の空欄にうまく適合する言葉を選ぶ必要がある。

文の構造を見てあげると、余の侍は「I」を探し出した。侍には「I」の侍と余の侍がいた。というような構造になっていることがわかる。

ここで、(ア) 秘蔵 を探し出した、や(ウ) 無為 を探し出した、(エ) 恥辱 を探し出した というのは日本語的に意味が通らないため(イ) 犯人 を探し出した、ということが妥当である。

また、余の侍(すなわち取り調べをした侍)は「犯人」である侍を探し出したことから、侍には余の侍と犯人の侍が存在した、ということは文脈上正しいため、(イ) が正答で間違えないことが伺える。

(5) (b)

返り点の問題。返り点のルールに注意して答える。

ア. 一二点が逆になっているため不適。

イ. 慶にかかるレ点が定義できないため不適。

ウ. 必にかかるレ点が必要。

エ. 正答

(5) (c) 正答例 嘘をつかないで、侍の恥辱を責めたならば

文章最後に書かれている「子孫が栄えた」という文の意義を問う問題。

今までの流れをまとめると、入道が太刀を奪われる ↓ 余の侍が犯人を見つけて太刀を差し出す ↓ 入道は侍を氣遣い、侍の恥辱的行為を多めに見てやる ↓ 結果として子孫が栄える。 という流れになっている。

この流れと、陸さんの「良い行いを積み重ねた家には必ず良いことがある、という教えがある」という中国の言い伝えがあるんだよ」という発言から複合的に考えてあげると、入道が、「大切な太刀を盗まれたにもかかわらず、盗んだ侍が面目を失い居た堪れなくなること」を危惧し、その場をやり過ぎした」という良い行いを行った結果、またこのような善行を積み重ねていった結果として、「子孫が繁栄する」という良い結果がもたらされたのだ、というように考えることができる。

これと、川島さんは「Ⅱ」、太刀は戻ってきたけど栄えなかったかもしれないね」と言っていることから、正答例のような解答が考えられるだろう。

「これは私の太刀ではない」と嘘をつかずに太刀を受け取り、盗んだ侍を取り立てたら、確かに太刀は手元に返ってくるはずである。しかしながらその場合、その侍は恥をかき、周囲との関係も険悪になるかもしれない。そうした不和や怨恨は、めぐり巡って将来の禍いとなり、子孫の繁栄にも悪影響を及ぼしかねないと考えられる。

要するに、“他人を追いつめず、恥をかかせない”という思いやりや寛容の心が、人と人との関係を円満に保ち、その徳が次の世代にも良いかたちで受け継がれるというのがこの物

Ucaroute.
あなたのルートが、ここにあり。

語の示唆するところである。